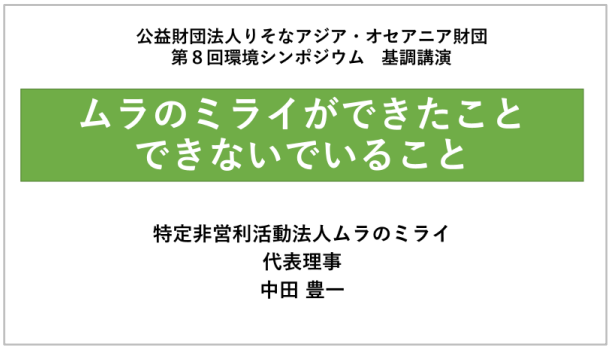
2020.11.10 りそなアジア・オセアニア財団第8回環境シンポジウム（於：シティプラザ大阪）

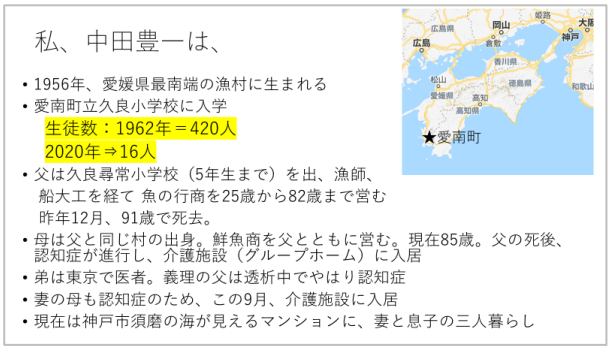
基調講演②講演録

「ムラのミライができたことと、できないでいること」

認定 NPO 法人ムラのミライ　代表理事

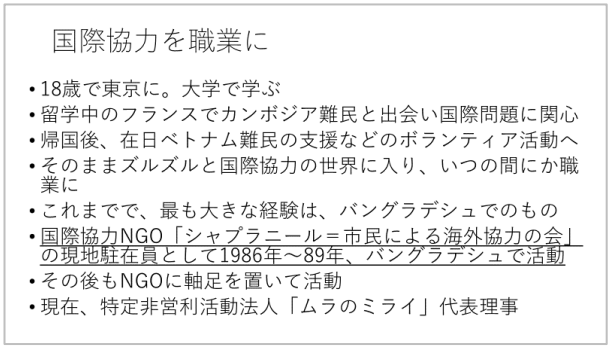
中 田　豊 一





私は、1956 年、愛媛県最南端の漁村に生まれました。1962 年に村の小学校へ入学しましたが、その当時の生徒数は 420 人でした。それが今年は 16 人で、わずか 50 数年間のうちにこれだけ減ってしまっています。この 50 年間、我々の想像を絶するような変化があったわけで、そのなかで私がどのように活動し生きてきたか、そして私が行きついた「メタファシリテーション」という手法について、お話させていただきます。

18 歳で東京へ出て大学で学び、フランスの留学中にカンボジアから来た女性難民にバイクをぶつけてしまったことがきっかけで、カンボジア難民問題に関心を持つようになりました。帰国後在日ベトナム難民などのボランティア活動へ入り、当時は NGO という言葉もなく、海の物とも山の物ともつかない世界へ徐々に入っていき、いつのまにか職業となりました。



これまでで最も大きな経験は、国際協力 NGO「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の現地駐在員として 1986 年から 3 年半ほどバングラデシュで活動したことです。その後も国際協力 NGO に軸足をおいて活動し、現在同じく国際協力 NGO である「ムラのミライ」という団体の代表理事をしております。ムラのミライは、インドでの活動から始まり、ネパール、インドネシア、そして現在はアフリカのセネガルなど、主に農村や都市スラムなどにいる人の自助努力を応援するという活動を行ってきました。ところが、メタファシリテーションという手法を得てからは、国内でも徐々に需要が高まり、現在は国内のほうへ活動の軸足を移しつつあります。

バングラデシュでの苦い経験（1）

	国土面積	人口
バングラデシュ	１４７，０００㎢（世界９１位）	１億５９００万人（世界９位）
日本	３７８，０００㎢（世界６２位）	１億２６６０万人（世界１１位）

- 当時のバングラデシュは、世界の最貧国として知られ、世界中から援助機関が殺到。
- 特に、農村貧困層＝土地なし農民の生活が困窮。
- シャプラニールも、土地なし農民による相互扶助グループの組織を促し、彼らの自助努力を側面支援して活動。
- 収入向上、保健衛生、教育などなど多岐にわたる生活支援を実施
- その企画・立案、監督などのために頻繁に農村を訪ねて農民とやり取りするのが最大の役割

私のバングラデシュでの 3 年半がどうして大きな経験であったかといえば、当時若造であった私にとってはとにかく苦しい日々だったからです。まずは、何が苦しかったのかということから話を始めたいと思います。当時のバングラデシュは世界の最貧国といわれ、世界中から援助団体が殺到していました。日本は援助後進国で、シャプラニールはそんな中にあっても小さな団体でしたが、それでも 80 名以上のスタッフがおり、私は管理者として組織の管理運営を任されました。当時の援助業界は腐敗が横行していたこともあり、日本でアルバイトぐらいしか経験の無かった私にとってそれはとても苦しい仕事でした。

最大の役割のひとつは、農村開発を企画、立案、監督するため、頻繁に農村を訪ねて農民とやりとりすることでした。

これは夜の村の光景です。

この写真はトイレの設置を私が監督しているところです。

いろんな困難がありましたが、人間は大概のものには慣れるもので、言葉も上手になってきました。そうしているうちに、本当の問題が浮上しました。それは実に単純な問題で、村人と何を話したら良いか分からない。村人と話しをするために来たのに、何を話したら良いかがわからない。つまり今自分がしている話が、適切かどうかがさっぱり判断できないということで、その問題は次第に大きくなっていきました。

バングラデシュでの苦い経験（続き）

- 不便な生活・異なった文化や風習に戸惑うが、徐々に慣れる。
- 言葉も上達するが、それに伴い本当の問題が浮上。
- 何を話題に村人と話を進めるべきかわからない。
- そこで：
  - ➢生活はどうですか？⇒相変わらずたいへんです
  - ➢どうすればいいですか？⇒シャプラニールの支援で自助努力してます
  - ➢最近導入した牛の肥育、うまく行っていますか？子牛の世話はしっかりやっていますか？⇒もちろんです！
- しかし、3か月後には…
  - ➢ 半分死んだから、買いなおすための支援が欲しい…
- 釈然としないまま、結局、追加支援するしかない

中田「生活はどうですか？」 村人「相変わらずたいへんです、貧しいです」

中田「どうすればいいですか？」 村人「シャプラニールの支援で自助努力しています」

中田「では、最近導入した牛の飼育は上手くいっていますか？子牛の世話はしっかりやっていますか？」

村人「もちろんです！」(村人全員が胸をはって)

ところが 3 か月後には、リーダーが私のところへきて、

村人(リーダー)「半分死んだから、買いなおすためのお金、資金支援をしてくれ」

バングラデシュでの苦い経験（続き）

- 特定のパターンに気づく：相手はこちらが期待する返事を知っていて、それを答えるだけ。そして最後には：
  「援助はありがたい。でも、さらにはこれをやってもらえると生活はもっと良くなる」
- 今やっているものが本当に役に立っているかあいまいなまま、次の支援を考えなくてはならなくなる。
- こうしたやり取りにウンザリ。でも、どうしていいのかさっぱりわからない。2年目になっても、3年目に入っても状況は改善しない
- 本当に役にたっているのか？必要とされているのか？そもそも人々は本当に貧困に苦しんでいるのか？考えれば考えるほどわからなくなり、心身ともに消耗。何が問題なのかもはっきりしない

これが援助する側の弱いところで、援助を止めてしまうとプロジェクト自体が失敗するということになり、追加支援せざるを得ない。それで釈然としないまま、予算も乏しいのに追加支援してしまうわけです。村人たちは不誠実でも不真面目でもないのですが、こういうことが援助事業をつうじて度々起こるのです。そうしているうちに私は、村人はこちらが喜ぶ答えを初めから知っていて、それを言っておいてから、最後に「これがあったら私たちの生活はもっと良くなります」と言ってくるということには気づきました。そういうやり取りがつづいていくと、本当に役に立っているのか、本当に貧困なのか、何のために苦しい思いでやっているのか、考えれば考えるほど分からなくなり、消耗し、混乱しました。1 年目が過ぎ、2 年目も同じ、3 年目は多少慣れるかと思いましたが何も変わらない。そうい

う意味で、私にとって実に苦しい日々でした。ただし、これは、バングラデシュのことを貶しているわけではなく、バングラデシュは本当にいいところで、大好きで、今でもよく行きます。

村人の姿は、曇りガラスの向こうにあった

- すべてがぼやけていた。何かがおかしいという感覚が強まるだけで、何が問題なのか、どうすれば改善できるのか、まったくわからない。
- 住民主体をうたっているものの、どうも違うような気がする。周りを見回しても、そのようなプロジェクトばかり。
- 援助業界の仲間に打ち明けたり、相談したりしたが、誰も納得する答えをくれない
- 1989年8月、疲れ果てた私は、任期を短縮して帰国。
- 1994年12月、この業界を離れ、心機一転やり直すつもりで兵庫県尼崎市へ移住。⇒翌月、阪神大震災！！
- ボランティアグループの緊急援助、復興支援活動に巻き込まれ、また援助の世界に戻る
- 5月、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンという国際NGOに就職。ネパールやフィリピンの現場を訪ねると、また同じことが起こる

問題は、私が人々の現実を真に把握できていないことでした。ではどうすれば把握できるのか。そういうことは、誰も教えてくれない。3 年半もすると疲れ果ててしまい、任期を短縮して帰国しました。しばらく東京の本部事務所に勤めた後の 1994 年末、心機一転、別の仕事をしようと、妻の実家がある尼崎へ転居しました。ところが転居後 1 ヶ月経たない 1 月 17 日、阪神淡路大震災の直撃を受けてしまい、NGO の関西の仲間から一緒に救援団体を創ろうと誘われ、私が事務局長に据えられてまた援助業界へ戻ってしまいました。そのうち当時大阪に本部のあったセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンで事務局長を募集しているから是非やってくれと言われて、他に潰しがきかないのがわかって、また国際援助の世界へ戻りました。ネパール、フィリピン、ベトナム、タイの現場を訪ねて、またはっきりしないまま援助の話が進んでいるというような釈然としない思いを腹の底にかかえながらも続けていたのですが、そうこうしているうちに、曇りガラスが晴れる時が突如としてやってきたのです。

曇りガラスが晴れる時が来た

- 2000年2月、外務省の評価団の一員として、飛騨高山のNGO（現ムラのミライ）のリーダー、和田信明と共にラオスに。そこで目にした和田のインタビュー術に目からうろこが落ちる！
- 和田は、暮らしぶりや問題については一切尋ねず、そのへんのものや作物などを指して；
- 「これは何ですか？」「何でできているのですか？」「誰が作ったのですか？」「いつ、手に入れたのですか？」などと淡々と聞いていくだけ
- 相手も淡々と答えていくうちに、やり取りのテンポがよくなり、会話がスムーズになってくる。
- そして、いつの間にか話は本題に近づき、「決定的なひとこと」が突如導かれる

それは、2000 年 2 月のこと、外務省の評価団の一員として、飛騨高山にあった国際 NGO（これが現在のムラのミライ）の創設者である和田信明と一緒にラオスへ行った時のことです。そこで目にした和田のインタビュー術に、大変大きな衝撃を受けたのです。彼は、暮らしぶりや問題は全く尋ねないで、その辺りのもの、農機具とかを指さして、「これ何ですか？」と言うのです。

「何でできているのですか？」「誰が作ったのですか？」「いつ、手に入れたのですか？」と淡々と聞いていくので、相手も何を聞いているのだろうと思いながらも、答えているうちに、だんだんテンポが良くなり、ふたりの世界が出来上がり、いつのまにか我々が聞きたいと思っていた話題の中心に近づき、やがて決定的なひとことが突然導かれるのです。
私は初め偶然かなと思ったのですが、なんどやっても同じことが起こる。それは私にとってまさしく目から鱗が落ちるような思いでした。

例えば、これはラオスの天然林を焼き払って米を植えるという原始的農法で、森林伐採の元凶として政府や国際機関がそれを防止するためのプロジェクトをやってその現場へ私たちは行ったのですけれども、私が山を見ながら担当の役人へ

焼き畑やめたって本当？

- 私：（山を見ながら）焼き畑はもうやってないんですよね？
- 担当役人：もちろんです。禁止されてますから
- 和田が代わる：「（道端の立て看板を指して）これは何ですか？」⇒「集落の地図です」「ここは何ですか？」⇒「水田です」
- 水田はどのくらいありますか？単収は平均どのくらいですか？世帯当たりの米の消費はどのくらいですか？と聞いていくうちに

「それじゃあ、生産量が足りないことになりますね？」
⇒「（自慢げに）ご心配なく、山の向こう（見えないところ）で焼き畑やってますから十分足りてます。（地図を指して）今年はこことここのあたりが中心です。でも最近、この辺では土地を巡る争いが起こって困っているんですよ」など本当のことが次々と出てきた

（中田）「もう焼き畑はやってないですね？」
（役人）「もちろんです。禁止されていますから。」
と返ってきたのですが、和田から「僕が代わって聞いてみようか」と言われて、交代する。
（和田）「（道端の立て看板を指して）これは何ですか」
（役人）「集落の地図です。」
（和田）「ここは何ですか」
（役人）「水田ですよ」
（和田）「水田はどのぐらいありますか？単収は平均どのぐらいですか？世帯あたり米の消費はどのぐらいですか？」
と淡々と聞いていくうちに、だんだん計算が成り立っていって
（和田）「それじゃあ、生産量が足りないことになりませんか？」

（役人）「ご心配なく。山の向こうの見えないところで、焼き畑をやってますから、十分足りています。」

とういうことで、政府の役人にとっては、国際社会から押し付けられた森林問題なんかより、地域の人がちゃんと食べるかどうかが、大切な現実であることを、和田があっという間に浮かび上がらせたのです。

和田インタビュー術の「秘密」の解明へ

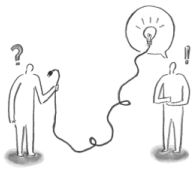
- これができなかったから、私のメガネは曇っていた！
- 足りなかったのは、コミュニケーション能力だった！
- 「教えてください」「えっ、何のこと。みんなやってるんじゃないの？」「自分でもわからないから、教えられないよ…」
- どうするか？⇒盗むしかない。追っかけが始まる
- だんだんわかってきたのは；
- 「何ですか？」「いつ買ったの？」「いくらだった？」「誰から買ったの？」と、
- ○○を中心に聞いて行っていること。しかも簡単な質問
- つまり**簡単な（シンプルな）事実質問**を繋いで行くだけ

写真左端が、和田がやっているところです。

和田へ「そのインタビュー術、僕にも教えてよ」と言っても、本人は「自分で何やっているか分からないし、教えられないよ」としか返ってこない。ということなので技を盗むしかないことがわかり、それからしばらくは和田の追っかけをしました。そうするとだんだん分かってきたことがありました。実は、「何ですか？」「いつ買ったの？」「いくらだった？」「誰から買ったの？」など事実を中心に聞いている、しかも簡単な質問だけをしていることが分かりました。つまり簡単な事実質問を繋いでいくだけなのです。よし分かったと思い自分でも試してみたところ、結構難しい。3つか5つは事実質問を続けられますが、そのあとが続かない。和田はそのコツを教えてくれないので、私は完全に行き詰まりました。そもそも和田の質問の方法と私のものは、根本的に何が違うのか考え込んだりしながら、試行錯誤を続けましたのですが、どうしても壁は破れませんでした。

しかし、「秘密」は残った

- ３つか５つは事実質問ができる。しかし続かない。練習が必要。しかし、どうやって練習すればいいのかわからない。
- 和田は教えてくれない。また壁にぶつかる…



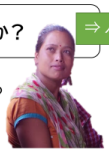
2年後、曇りガラスが晴れる日がついに来た！
バングラデシュの村の研修所でのこと

1．朝ごはんは何が好きですか？ ⇒ごはん

2．朝ごはんはいつも何を食べますか ⇒ごはん

3．今朝は何を食べましたか？ ⇒パンでした

この次には何と聞いたでしょうか？



17

ところが、2 年後、バングラデシュの村の研修所で、ついにその壁が破れる日が来ました。10名ぐらいのバングラデシュの若手スタッフを研修してくれとシャプラニールから10年ぶりに頼まれて現場で研修をしていました。10人のうち7～8人が女性の若いスタッフです。

私はまず彼女たちの一人に向かって

（中田）「朝ごはんは何が好きですか？」と尋ねました。すると

（女性）「お米、ごはんが好きです。」と答えました。2番目に

（中田）「朝ごはんはいつも何を食べますか？」と尋ねました。すると彼女は、

（女性）「ごはんよ。」と答えます。そこで私は、普段和田が聞いているような単純な事実を聞いてみようと考えました。

さて、私は何と聞いたか分かりますか？これが分かれば、メタファシリテーションの第1歩が踏み出せたことになります。簡単ですね。

私は、3番目に

（中田）「今朝は何を食べましたか？」と聞いたのです。そうしたら

（女性）「パンよ」と言うのです。それを聞いてみんなニヤニヤしています。次は和田だったらどう聞くだろうと私は考え、

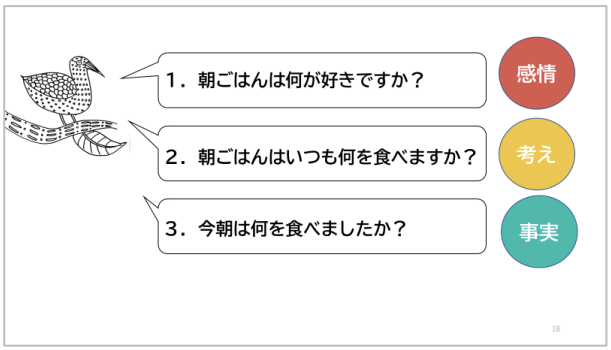
（中田）「昨日朝何を食べましたか？」と聞くと、彼女は

（女性）「昨日もパンでした。」と言うのです。そうなると、

（中田）「一昨日は何を食べましたが？」と聞くしかない。彼女は顔を歪めて

（女性）「そういえば、一昨日もパンでした。ごめんなさい。」

と言ったわけです。みんな大笑いです。そこで、次の質問として、全員に3つの質問のなかで事実を聞いたのはどれだと聞いてみたわけです。そうするとあるお姉さんは、2番目と3番目だと。隣の賢そうなお姉さんは、「違う、3番目だけよ」と。私は、「そのとおり事実を聞いているのは3番目だけですね。それでは1番目は何を聞いているのですか」と尋ねました。彼女は、「感情もしくは気持ちのどちらかだと思います」と。私は、「そうね、お姉さん賢いね。そしたら2番目は何を聞いているのでしょうか」と尋ねました。



この質問こそ、私は当時 44～45 歳だったと思いますが、人生を変えた質問だったと思います。朝ごはんはいつも何を食べますか、この質問は事実を聞いていないですね。これは実は、相手の思い込み、考えを聞いているに過ぎないことにこの場で思い至ったのでした。

練習方法がわかる⇒2番の質問をやめる

- いつもは？毎日は？ほとんどの人は？農民の皆さんは？などなど、一般化された質問、一般的な質問、つまり2番のパターンの質問は、一見すると事実を聞いているように思えるが、実は、意見、考えを聞くものだった
- 振り返ってみると、私は、村人相手に、そういう質問ばかりしていた。しかも、それで事実を聞いていると勘違いしていた。この「勘違い」こそが、私のガラスの曇りの正体だった
- これがわかった私は、自分の質問が、３つのうちのどれに当たるかを常に意識しながら、もし2番だとわかったら、それを保留して3番に変えるよう心がけた。練習方法がわかったのだ！

この写真はそれから 10 年後ぐらいのものですが、その研修を授けに行ったのがこの研修所でした。一番端にいるのが私です。

そこで衝撃的な気付きが訪れたわけです。「いつもは」「毎日は」「ほとんどの方は」「農民の皆さんは」などを使った一般化された質問、一般的質問は、さっき言った 2 番目の質問、つまり、一見すると事実を聞いているようだが、実は意見や、往々にして思い込みに繋がる質問であることに気が付いたのです。振返ってみると、バングラデシュで仕事をしていた頃、私はそういう質問ばかりしていたのですね。「みなさん、しっかり牛の世話をしていますか。」そう聞かれると、どうとでも答えられる。全員が「おう」と答えても、まるっきり嘘である場合も在りうるわけです。なのに、私はそういう質問ばかりしていた。だからメガネが曇っていたのです。私の曇りガラスの質問の正体は、本当は考えを聞く質問なのに、それを事実を聞く質問であると勘違いしていたことだったのです。それからは、自分の質問が、3つの質問のどれに当たるのかを常に意識するようにして、もし2番の質問だと思ったら、なるべく 3 番の質問に変えるという自己訓練を繰り返しているうちに、徐々に和田のような質問が組み立てられるようになりました。それから1～2 年のうちには、かつてラオスで見た和田のレベルまで到達しました。私は得意満面だったのですが、その間に、和田はさらに先まで、とんでもない高いレベルまでいっていたのですが。そのことは後でお話します。

『開発援助劇場』を超えて

- 「絆が大事ですよね？」「助け合う関係が必要ですよね？」と呼びかければ、誰でも「そうだ」と答える
- インドネシアでの例
- **タバコを吸うのは体に悪いと思う方、右手を挙げて下さい→全員**
- **では挙げた右手はそのままで、タバコを吸う習慣のある方、左手を上げて下さい→7割がバンザイ**
- こんな結論を得るために住民ミーティングやワークショップをやるのか？本人も怪しいと感じている「意見」を聞いて何になるのか？
- 途上国では、この手の呼びかけから始まった住民グループが山ほどでき、援助が終わったら尻すぼみになって消えて行った「住民主体の組織」の残骸だらけ。金の切れ目が縁の切れ目、というわけ
- 地域の人々は親切でやさしく、こちらに合わせてくれる。この「開発援助劇場」の芝居が終われば、それぞれ元の自分に戻っていくだけ。何も変わらない
- では、これを防ぐためには、どう働きかければいいのか？

インドネシアでのことです。20 名ぐらいの現地 NGO のスタッフを相手に、「タバコ吸うのは健康に悪いと思う人は右手を挙げてと」言うと、ほぼ全員が右手を上げました。次に「右手はそのままに、タバコを吸っている人は左手を挙げてと言ったところ、15～6 人がバンザイするかたちになったのです。私の横で通訳してくれていた日本人の友人もバンザイをしています。彼は、「体に悪いことはわかるけど、おいしいんですよね。タバコは」とここが大事なのですけれども、相手の意見を聞くべきだとよく言われます。意見は本当に聞くべきものなのでしょうか。特に利害関係がある場合など、相手の意見なんて一体何なのだということです。何とでも言えるのが意見なのですから。

問題を知るためには問題を聞かない

- 「何か問題がありますか？」と尋ねる。問題が知りたいので。
- ⇒相手は、「何か欲しいものがありますか？」と頭の中で翻訳
- 特に信頼関係がなければ、本当の問題など打ち明けるはずがない
- 結局、欲しい物、足りない物を数え上げることになる
- 信頼関係とは何か？⇒**助ける側、助けられる側の立場を超えて、同じ人間として、互いを尊重し合える関係。つまり対等感が底になければならない**
- **結局のところ、一番大切なのは、相手の自尊感情を大切にする姿勢。しかし、気持ちは伝わらなければないも同じ。**
- **だから、私たちは、「なぜ？」と聞かない。**

以来、和田と二人でそういう既成概念をどうやって打ち破るかを考え、実践しながら、少しずつ体系化し、言語化してきました。例えば、問題を知るためには問題を聞かない。理由が聞きたければ、何故と聞かないというふうに。特に利害関係や権力関係があれば、何故は禁物です。意見や考え、思い込みを尋ねる最悪の質問は、なぜ、どうして、と聞くことです。これを完全に封じ込める。

「なぜ？」と聞かないのは「なぜ」なのか？
「なぜ」私たちは安易にそう聞いてしまうのか？

- 2番目の質問、つまり「意見や考え＝思い込み」を尋ねる最悪の質問は、「なぜ？どうして？（Why)」。これを完全に封印！
- どうして遅れたの？　⇒道が混んでた
- どうしてやらなかったの？　⇒急用ができた
- 私たちは、あまり好ましくない自分の行為や状態について「なぜ？」と聞かれると、責められている気がして、つい **言い訳** してしまう。それを聞いて何になる？本当の理由はわからない上に、どちらも不快になるだけ。
- 「夜は陸から、昼間は海から風が吹くのは、なぜ？」とは全く別物。
- この違いがわからず、課題分析できると勘違いして「なぜ〇〇しなかったの？」と聞いてしまう。学校でも家庭でも、職場でも！

私たちは、あまり好ましくない自分の行為について、「なぜ？」と聞かれると、責められている気がして、つい言い訳をしてしまうのです。

例えば、「どうして遅れたの」⇒「道が混んでいた」

「どうしてやらなかったの？」⇒「急用ができた」

初めから言い訳が出てくると分かっている質問を何のためにするのか。みなさんの中には、組織の上層部や中間管理職の方もいらっしゃると思いますが、部下が失敗したことに対して、「なぜだ」と聞くと、ある種の言い訳が出てくるに決まっているのです。だがどうしても何故と聞かざるを得ない。ここをどうやってひっくり返すかというのが、私たちのメタファシリテーション手法の核心です。

「夜は陸から、昼は海から風が吹くのは、なぜ？」と先生が聞くのは、先程塩瀬さんが話されておられた「発問」であって、これはとくに問題ない。ところが、「なぜ遅れたの？」というのには、答えがいくらでも作れてしまいます。なのに母親は、「なぜ勉強しなかったの？」「もうすぐ試験だと分かっていたでしょう？」と母親は言ってしまう。子供は勉強したくなかった、あるいは出来なかっただけで、何故しなかったか自分でもよくわかっていないのに何か答えてしまう。それなのに、私たちは聞いてしまう、「なぜ？」「どうして？」と。

相手と対等感を築き、自らが課題を分析することを促す、この手法を「メタファシリテーション」と名付けた。
和田信明とともにその手法を発展させ、体系化し、普及してきた⇒今やライフワークに

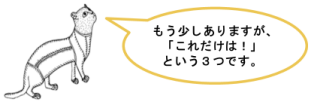
メタファシリテーションのメタは、メタ認知のメタ。他者を見ている自分をよく見ながらやり取りする、ということ

相手と対等感を築き、自ら課題を分析することを促すこの手法を、私たちは「メタファシリテーション」と名付け、発展させ、体系化、言語化し、普及してきました。そしてこれが徐々に私のライフワークとなってきました。

メタファシリテーションのメタというのは、メタ認知のメタからとっています。

メタファシリテーション
３つのルール

1. 事実のみ質問する
2. 提案、アドバイスはせず相手が気がつくまで待つ
3. 自己肯定感に配慮する（相手が答えやすい質問をする）



メタファシリテーション3つのルールは、まず事実のみ質問するということ。2 つ目が、提案、アドバイスはせず、相手が気づくまで待つ。そういう意味からも、質問は事実しかしない。3 番目が自己肯定感に配慮する。これは相手が答えやすい質問をする。内容的にも心理的にも、答えやすい小さな質問を積み重ねることで、相手に分析を促すということです。

途上国では絶大な効力を発揮

- インド農村でのプロジェクト
- インドのスラムの女性銀行
- イランの水資源管理
- インドネシア漁村のゴミ問題
- 「途上国の人々との話し方」は、英語、ペルシャ語、インドネシア語、フランス語、アラビア語に翻訳される。
  青年海外協力隊員のバイブルとさえ呼ばれる。

幸い、途上国では絶大な効力を発揮してきました。2010 年にこの手法を、途上国のことに限る形で、「途上国の人々との話し方」という本にして出しました。既に日本で 5000 部を売り切っていて、英語、ペルシャ語、インドネシア語、フランス語、アラビア語に翻訳されています。JICA の青年海外協力隊で海外に行く人たちの中ではこれをバイブルと呼んで赴任地に持参する人も増えています。こうして国際協力の世界

では相当に浸透し、評価が高まってきています。

この写真の黄色い服の人が和田です。インドの村で人々とやりとりしているところです。

これはインドネシアの漁村の井戸の前で、村人が、「井戸の水が毎日毎日減っていくのだけれども、先生どうしたらいいんですか」という問いを受けて、事実質問でやり取りしているところです。

和田の名人芸：命はどこから来るのか？

- インドネシアの辺鄙な漁村で

村人（V)：海岸がゴミだらけです。皆がポイ捨てするから。どうしたらいいですか？
和田（W)：皆さんはイスラム教徒ですよね。
V：はい、村人は皆ムスリムです。
W:皆さんの命はどこから来ますか？
V:もちろん、アッラーからです。
W:では、命が終わったらどこへ行きますか？
V:この世で終わった命はアッラーにお返しします。

和田の名人芸：命はどこから来るのか？（続）

- 波打ち際の合成洗剤が入っていたビニール袋を指して

W:これは何ですか？
V:洗剤の袋です。
W:どこから来たものですか？
V:店で買ったものですが、もともとは工場からでしょうね。
W：工場から来たものをどこに返していますか？
V：海ですね。このあと、村人は沈黙・・・
W：アッラーからいただいものはアッラーにお返しする。土から来たのものは土に返す。海からのものは海にもどす、ということですね。
この後、村人はゴミの分別の仕組みを導入し、村は、ゴミの山から解放された。⇒本当の話です

和田の名人芸を一つだけ紹介しておきます。インドネシアの辺鄙な漁村で、村人がやってきて、「海岸がゴミだらけなのだがどうしたらいいですか？」と和田に尋ねました。

和田「皆さんはイスラム教徒ですね」

村人「はい、村人は皆ムスリムです。」

和田「皆さんの命はどこから来ますか」

村人「もちろん、アッラーからです」

和田「では、命が終わればどこへ行きますか」

村人「この世で終わった命はアッラーへお返しします」

そのあたりの海辺に落ちている洗剤が入った空のビニール袋を指して

和田「これは何ですか」

村人「洗剤の袋です」

和田「どこから来たものですか」

村人「店で買ったものですが、もともとは工場からでしょうね」

和田「工場から来たものを、どこに返していますか」

村人「海ですね。」このあと、村人は静まり返りました。

しばらく余韻をもたせたあと和田さんは、

「アッラーからいただいたものはアッラーにお返しする。土から来たものは土に返す。海からのものは海に戻す。これがエコロジーというものです。」

こののち、村人はゴミの分別の仕組みをつくって、完全ではないですが、以前と比べて海岸沿いのゴミの量は、見違えるように少なくなったとのこと。これは和田のいないところで村の女性から直接聞いた話です。彼女とは、たまたまある会合で一緒になって、「おばあちゃん、〇〇村の人だね。」と私が話しかけたところ、「そうよ。あなた、和田先生が私たちの村でやってくれたこと知ってる？」と返してきた中で出てきた話でした。これを聞いて、和田のすごさに改めて驚嘆したものでした。

これは私です。ネパールの村で、左側にいるのはシャプラニールネパールの現地スタッフたちです。右側にいるのは、村の女性たちです。どうやって村の女性たちの現実を浮かび上がらせるかというインタビュー術の研修をスタッフ達にやっているところの写真です。私は和田ほどまでは使えないにしても、手法を体系化し理論化して、誰でも使えるようにしましたので、必要なことはやり取りできるようになりました。その

レベルのものを、いろいろなところへ行って、現地の人たちに教えているわけです。

では、日本国内では？

- 本格的な運用は５年ほど前に始まったばかり
- とはいえ、個人レベルで行動変化に向けた気づきを促したり、課題分析を手助けしたりは、すでに多くの成果を上げている。

◆岐阜県郡上市での獣害対策における住民と援助団体とのコミュニケーションに

◆沖縄名護市での地域振興職員の研修に、青森での医療福祉ワーカーの研修に

◆最近一番成果を上げているのは、本部事務所を置いている西宮市の子育て支援グループへの協力とその延長の「思春期のお子さんを持つ親のためのコミュニケーション講座」に

ひとりで子育てを担って苦しんでいるお母さんたちの相互扶助グループのコミュニケーションツールとして、当事者間や家族間、特に子どもや夫との関係の改善のために、大きな効力を発揮

一方、日本での運用は５年ほど前に始まったばかりです。特定の地域で特定の課題に対して使いたいという要望に応える形で増え、いろいろな取組みを重ねてきました。最近成果が一番上がっているものの一つに、本部事務所がある西宮の子育て支援グループへの協力の一環でスタートした「思春期のお子さんを持つ親のためのコミュニケーション講座」があります。「テストが近いと分かっているのになぜ勉強しなかったの」というお母さんの問いを、子供が自分の状況を自分で分析し勉強するよう働きかけられるように変えるための講座です。私自身も驚くような効果を上げ、大きな反響を呼んでいます。

できたこと

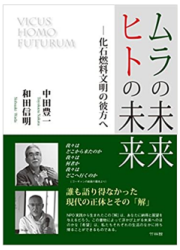
- これまで述べてきたように、国際協力の世界ではもちろんのこと、日本国内でも、小さな団体の小さな現場での試みとしては、予想以上の成果を挙げていると思う。
- 和田と私だけが使えたメタファシリテーション手法を自在に駆使し、他者に伝えることができる若手の人材も、どんどん育ってきている。
- 念願だった日本国内での行政による対人支援の活動現場への導入にも、道が開けつつある。厚生労働省の支援による「地域住民の健康増進に携わる人のためのコミュニケーション研修」事業を現在展開中。

ムラのミライという小さなNGOのこのような試みが、日本国内でここまで成果を上げてきたことには満足すべきかと思っています。当初和田と私だけしか使えなかったメタファシリテーション手法を、私たちの団体はもちろんのこと、周辺の若い人たちも習得し、使えるように育ってきています。途上国の現場においてもそういう人たちが育ってきており、手法が広がってきているのはとても嬉しいことです。行政による対人支援の活動現場への導入へも道が開けつつあり、厚生労働省の支援で現在4県の保健師さんたちを相手に、オンラインですけど、メタファシリテーションの研修を進めていて、これが結構大きな規模でやれています。

ムラのミライが出来ないでいることについても、お話ししておきたいと思います。私たちが途上国で環境問題や貧困問題に対処してきて必ず浮かび上がってくる現実のは、プラス

できないでいることは？

- 丁寧な事実質問を重ねるうちに浮上してきた近代文明の正体を、化石燃料文明と名付けた。
- 化石燃料の圧倒的な力による社会や生活のあり方、環境の激変に生身の私たちは付いて行けない。自己紹介で述べたように…。ミクロレベルでの努力ではどうにもならず、無力感に苛まれることも。
- 特に、生物としての人間の存立基盤である「水、土、植物」が急激に衰退。それを指をくわえて見ているだけ。途上国の人々はそこへの依存がより大きいのに。



できないでいることは？(続)

- こうしたマクロな話し、一般論、理想論は語るのは易しいが、行動するためには、「大きな川の流れに抗して小舟を漕ぐ」感覚との自分なりの付き合い方、処し方を持っている必要があるが容易でない。
- 等身大の生活の中で見えてくる「事実」を基に自分の頭で考えるという姿勢と手法を広めているが、「意見の偏重」は根強い。
- その傾向を強く持つ社会・人文科学に受け入れてもらえないため、学校教育や政策形成に対する影響力を持てないできた。
- とはいえ、一昨年あたりから、厚生労働省や農水省の若手官僚たち、東北の医療従事者のグループ、幼児教育に取り組む若手研究者たちなど、私たちの手法と考え方に共感して、その普及と発展に協力してくれる若い力を国内で得たり、企業からも社内コミュニケーションのツールとして関心を持たれ始めたりと、展望は急激に開けつつある。若い力に期待！

チックに代表される大量生産された商品が、高速大量輸送システムによって途上国の村々へも急速に浸透しつつあることです。その力はあまりにも大きく、村人たちは全く抗することができず、自然資源を切り売りしながら、外から来た商品を買ってしまうという消費者になってしまい、それが環境の破壊と貧困の悪循環を生んでいる。そのことに対して、ミクロの部分では私たちが出会う人々に対して行動変容を導くことはできるのですが、水や土や表土が急速に劣化し、その結果としてさらに貧困が深まるという悪循環に陥っていることに対しては、指をくわえて見ているしかない。その点では、大きな無力感を感じています。大きな川の中で、流れと反対方向へ手漕ぎのボートで漕いでいるような感覚です。いつまで私は漕ぎ続けなければならないのだろうか、と切なくなる。隣りを見ると、たくさんの同じような小舟が浮かんでいて、互いに競争しているのですが、よく見るとみんな後ろへ流されているだけです。このことへどのように抗すればいいのだろうかと、今も問い続け、悩んでいます。

もう一つ、事実をもとに質問する姿勢や手法を広げることを進めているのですが、人文科学や社会科学の先生方は、いまだに「意見を聞く、意見を尊重する」という姿勢で住民との対話に臨んでいるのが大勢で、そこへ一撃を与えることがなかなかできません。学校教育や政策形成に対し絵影響を持つためには、そこから変えなくてはならないのです。とはいえ、最近厚生労働省や農水省の若手官僚が興味を持ってくれるようになり、少しだけ希望が出てきたかなというのが、私のいまの気持ちです。

ご清聴ありがとうございました。（終了）